

道標

小学校から現在まで、学校・教育機関に在る。小学校から大学院生まででは教育を受ける側。助手時代から現在まででは教育をする側。ただ、簡単に割り切れず、大学院生の時まででも友達・後輩を教えていた。逆に、今でも院生や研究室スタッフ、共同研究先の方にさまざまなことを教えていただく。これは大学という教育研究機関だけでなく、どのような場所、家庭、職場であっても同じであろう。年齢とか立場で区切れるものでもない。

さまざまな場面で「基礎」が大事で、その上に「応用」があるといわれた。「基礎学力」の重要性は自分が子供の時代から言われているが、「基礎学力」とは何なのだろうか。例えば漢字を書くことや算数の計算、逆上がりができる。歴史の事象や星座の名前を知って

「基礎」の重要性

いる。小学校で習ったことを思い出すとこつしたものだろう。では、どうやって覚えたのか。たくさん繰り返して身に付けたことがほとんどだろう。「学力」というから話が難しくなるわ

渡辺 正夫



東北大大学院
生命科学研究所教授

数の計算。昔も今も反復計算として「ドリル」をやる。小学校のころ、なぜこんなに同じことをやるのかと思っていたが、続けたら、どれくらいの数字になるのかという想像ができるようになった。デジタル化が著しい現在、計算の基礎である反復練習不足は考えられないだろうか。

漢字や英単語は辞書を引いた。電子辞書の方が簡単かもしれない。しかし、電子辞書がよくないところは、ピンポイントでその言葉しか見えないこと。辞書や本をめくると、途中のページに書いてある文字列や写真などが自然に

積み重ねを欠く現代

けで、家庭生活や社会生活での「基礎的な事柄（基礎力）」も同様に、反復することで知らないうちに身に付けていることが多い。

では、昔と現在でこの「基礎学力」「基礎力」を身に付けるために何か変化が起きているのだろうか。例えば算

目に入る。この単語の次にはこんな単語とか、こんな図表が載っていたなど、本来とは関係ないことが繰り返しのよって自然に身に付いた。

遊びの中にも繰り返しはあった。小学校のころに広場で遊ぶ時、かくれんぼや缶蹴りなど、同じようなゲームで

ふるさと伝言

少しパターンの違うものがあつた。これらを通して人間的相互関係という基礎力が身に付いた。ところが、今の子供たちは外で遊ぶことも少なく、ゲーム機を持ち寄っても相互通信機能を生かすわけでもなく、個別に遊ばらしい。これでは相互関係という基礎力の養成には乏しい。

今と昔を比較し、何が欠けているのかを考えると、それが「基礎学力」「基礎力」と思えてしまうが、小学校での基礎が中学で、中学での基礎が高校で発展性を持つようになる。昨今、大学の教育問題で話題は、「秋入学」「就職活動と研究のバランス」「大学院教育」など多岐にわたっている。しかし、大学、大学院、さらには社会での「生きる力」を育てるためには、小学校や、それ以前の「基礎学力」「基礎力」の積み重ねが不可欠ではないだろうか。大きなことを議論する前に基礎基礎の足元を固めないと、砂上の楼閣になりにかねない気がしてならない。

(わたなべ・まさお 今治市生まれ)